

水産孵化場は変わる。変わろう。変わらないこと。

水産孵化場は平成21年4月から新体制で業務に取り組みます。この1年間は水産孵化場にとって、大きく変革する年になります。地方独立行政法人への移行に向けて、水産孵化場ではその準備が進められているところです。

これまで北海道庁の出先機関として水産孵化場は、さけますの種苗生産と放流事業、さけますの資源および増殖管理とそれに関わる試験研究と技術開発、川や湖沼そして農業用水路など内水面における漁業および増養殖に関する試験研究と技術開発、さらに技術指導や普及に取り組んで参りました。これらの業務は、北海道の水産業の振興を主目的として、道民のみなさんの生活の質の向上を目指して進められてきたところです。

地方独立行政法人に移行する水産孵化場の業務目的は、これまでと変わるところはありませんが、取り組む姿勢（システム）や考え方（選択基準）、予算などに変化が求められています。限られた研究資源（研究者、研究施設、それをサポートする人員）を有効に活用して、質の高い研究成果をあげるべく、水産孵化場の職員、ひとりひとりの自覚と努力に負うところが大きいと言えます。

ただし、ひとりひとりが有する能力と努力は限られております。この限界を超えるためには、チームとして課題に取り組み、成果を上げることが欠かせません。団体スポーツでよく言われる「ケミストリー効果」です。平成21年3月に行われた第2回WBC（ワールドベースボールクラシック）の日本代表チームは、苦しい試合を重ねていく課程で、チームに「ケミストリー」が起きて、個々のプレーヤーがあきらめずに、その能力を結集した結果、見事に2年連続の優勝を果たすことができました。試験研究の分野でも、これからはチームとして課題やニーズに取り組み、目指すべきゴール（出口）を明確にして、成果をあげること

がいつそう重要になると考えます。

ところで、昨年、北海道にもどってきた秋サケの数は、8年ぶりに4000万尾を割りました。秋サケは、道民の豊かな秋の味覚であるとともに、北海道水産業では3本の柱として、ホタテ貝および昆布とともに大切な漁業資源を形成していることから、水産孵化場は、その原因究明に取り組むことが求められています。また、湖沼や河川の下流域で漁獲されるシジミ貝（ヤマトシジミ）やワカサギ、白魚など、北海道には食べておいしい内水面の食材が豊かです。内水面の旬の食材をベースにした、地域限定ならびに期間限定の地産地消の取り組みも、北海道の一部の地域で試みられるようになってきました。

水産孵化場は、地方独立行政法人では「さけます・内水面水産試験場」に名称が変わることになりますが、しかし、その主な業務と目指すべきゴールは変わりません。水産孵化場は、これからも道民のみなさん、そして水産業に関わる方々とともに、北海道の水産業の振興ならびに道民のみなさんの質の高い生活の向上に取り組む所存でございますので、変わらないご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

（かわむら ひろし：場長）